

日本基督教団
柿ノ木坂教会

牧 師 渡邊 義彦
協力牧師 松下 恭規

教会報

191号2019年1月27日

〒152-0022

東京都目黒区柿の木坂

1-31-19

電話：03-3717-3870

Fax：03-3717-3916

巻頭言

「新しい天、新しい地」

——イザヤ書第65章17節——

牧師 渡邊 義彦



見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない。

(新共同訳聖書)

新しい年、新しい時代が来る、と言うとき、平成の年号が終わり、その一夜にして、世界にあり続ける一切の涙が拭われると思うほどに、わたしたちは単純ではありませんし、愚かではありません。なお、新しい時代と言われる、新しい年号で呼ばれる時代にも、依然として涙が続くことを承知しています。しかし、それでもなお、わたしたちは期待するのです。新しい時代は良い年月となるのではないかと。

預言者は語ります。「わたしはエルサレムを喜びとし、わたしの民を楽しみとする。泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない。そこには、もはや若死にする者も年老いて長寿を満たさない者もなくなる。百歳で死ぬ者は若者とされ百歳に達しない者は呪われたものとされる」(19、20節)。預言者たちが今置かれている状況は、おそらく、わたしたちの日常とは比べものにならないほどに悲惨な状況です。神の都と呼ばれたエルサレムは、大国に破壊され、神の民が精神的な支柱、信仰のセンターとして建ててきた神殿は灰燼に帰し、国を再建すべき者たちはすべて捕虜として連れて行かれてしまいました。紀元前6世紀、イスラエルが経験した大国バビロンによるエルサレムの総攻撃を預言者たちは経験しています。民は経験しています。

この民に、預言者たちははしかし、「見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして、その民を喜び楽しむものとして、創造する。わたしはエルサレムを喜びとしわたしの民を楽しみとする。泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない」(18、19節)と、神の言葉を取り次ぎ告げるのです。このように預言者が語ることは絵空事でしょうか。空想、虚言、嘘でしょうか。ある人々にはそう思えたに違いありません。圧倒的に、目を、耳を支配する現在の状況、耳にし目にするには、そのようなことはあり得ないと実感させるに十分だったはずですが。預言者たちは、こうあったらよいという淡い期待を告げることで言葉を濁そうとしたのでしょうか。その場限りの出任せのはったりの言葉で民を慰撫しようとしたのでしょうか。

もし、彼らが語った言葉が、そのような言葉であれば、時代を越えて、この言葉が二千年、二千五百年と人々に伝えられてくることは決してなかったでしょう。現代においても世界中の言語に翻訳されて、自分の国の言葉で、二千数百年前に語られた言葉を聞くということほどに、もしそんな言葉であれば、愚かしいことはないでしょう。そのような言葉は、決して時代に耐えることはできなかったはずですが。

この言葉に語られている真実を信じた人たちがいるのです。目の前の状況がどのように悲惨であったとしても、どのように多くの涙が流され、叫びが上げられるようなことであろうとも、見えることがすべてではない、耳に聞こえてくるのがすべてではなく、この体の目では見え

ないけれども確かにあること、この体の耳で聞くのではなくて聞こえてくることに、真実があることを信じた人たちがいたのです。

神は言われます。「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。」そして、神が創造なさる、新しい天、新しい地においては、「狼と小羊は共に草をはみ／獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし／わたしの聖なる山のどこにおいても／害することも滅ぼすこともない」(25節)と主は言われます。

そのような世界を、わたしたちはまだ目にしていません。わたしたちの日常では、狼は腹を空かせれば目の前の無防備の小羊を直ちに襲い、獅子は牛を我が物とし、蛇は毒をもって敵を攻撃するでしょう。しかし、そうであれば、神がお語りになる世界はどこにもないユートピアでしょうか。

神が既にはじめられた新しい天、新しい地は、確かに秩序を回復し、すべてが調和し支配をはじめています。わたしたちの聞くところ、見るところではたとえおぼろであったとしても、世界のここかしこに新しい神の御支配がはじまっていることを、わたしたちは知らなくてはなりません。クリスマスは、このことを決定的なことでしました。神が、世界を救われる為に、御独り子をわたしたちのもとへと遣わされたのです。

神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない(ヨハネ3:17、18節)。

イエスと名付けられる赤子は、わたしたちの救いを遂げてくださるために生まれてくださいました。わたしたちの涙も、喜びも、楽しさも、苦しみも、わたしたちが経験する暑さも、寒さも、わたしたちと同じように経験してくださるお方として、主は生まれてくださいました。そして、主イエス・キリストが、わたしたちを救ってくださるために負わねばならなかった御苦しみは、わたしたちのうち誰一人も負うことも、経験することもできないことでした。主は十字架を負ってくださるために、人としてクリスマスに生まれてくださいました。

御子を信じること、キリストを救い主として信じることは本当の幸いです。時代の変遷に、社会の変化に耐え得る信仰は、わたしたちの信じる気持ちの強さや弱さと言ったことではありません。神が与えてくださる信仰が、時代に奔騰される、このようなわたしたちを、キリストの御もとにとどめ続けます。わたしたちの日に、わたしたちの間に、わたしたちのただ中にはじまっている新しい天、新しい地を、神が支配される国を、わたしたちに信じることができるように、わかるように、キリストは、わたしたちと同じものとなってくださいました。キリストを知ることの大切さを思います。

聖書が告げる平和は、単に戦争が無いことだけを言うものではありません。聖書が告げる平和は、神とわたしたちの間の平和が打ち立てられていることに何よりも言葉が尽くされています。このことを逆説的に言うならば、たとえ戦争があっても平和であると言い得るのです。それは軽々しく戦争があっても良い、と言っているものではありません。戦争が無いとしても、わたしたちの日常に不安や悲しみ、苦しみがあり続けるならば、そこには同じ涙が流されています。しかし、この悲しみのただ中で、苦しみのただ中で与る平安、平和があります。神が創造なさる新しい天、新しい地に神が創り出される平和があります。神の平安が支配をはじめています。神の御支配を喜び知る者たちに、神の平安、平和が与えられています。このことを、預言者たちは人の目には到底平和を語り得ない状況で語ったのです。

キリストは、わたしたちの平和です。キリストが、神とわたしたちの間に、何ものによっても取り去られず、決して崩されることのない平和を樹立してくださいました。平和の君の誕生を讃える賛美に、わたしたちも思いを、声を、歌を、世界の教会と共に合わせましょう。

集会出席統計(月平均人数)

	2018年	
	11月	12月
主日礼拝	86.5	98.4
聖書と祈り会	16.3	14.0
教会学校*	102.3	138.2

*保護者、教師を含む

(第1主日開催)	11月4日	12月2日
聖餐夕礼拝	13	9

☆☆☆ クリスマスの行事報告 ☆☆☆

☆クリスマス主日礼拝 12月23日(日) 10:30~12:00に行われました。

☆クリスマス愛餐会 主日礼拝後12:30から14:00まで開かれました。



↑ 愛餐会風景 ・初めての方、久しぶりの方の紹介も ・右の2枚は幼稚園園崎主任司会でのゲーム

☆教会学校のクリスマス礼拝が15:00から行われました。



↑ 礼拝の中で行われるページェントのリハーサルの様子 大天使ガブリエルの御告げや羊飼い、東の博士

☆聖夜(クリスマスイブ)礼拝 12月24日(月) 17:00~第1部:礼拝

17:30 第2部:祝会、バルコニーでのハンドベルの演奏が、星空から降ってくるように聞こえました。また、「キャンドルライト・キャロル」などの聖歌隊の演奏、そして、聖歌隊・石丸兄のリードで、恒例のクリスマスの讃美歌を皆さんと一緒に。最後に、青年会によって配られたキャンドルの灯りで、「きよしこのよる」を歌いました。このとき、天のみ使いが吹くトランペットもバルコニーから響きました。

18:30に終了。玄関ロビーで、礼拝委員会による恒例の温かいココアとクッキーなどのサービスがありました。

クリスマスイブにふさわしく、寒いけれど、星が美しくまたたく中を、皆様は家路につきました。



←・↓ハンドベルと、聖歌隊の演奏のあと、石丸兄の司会で皆さんとクリスマスの歌を歌いました。



「私の聖句、私の讃美歌」

鈴木 丈哉

12月中旬に、ある女性ミュージシャンによる五反田でのコンサートを聴きに行きましたが、場所は長老派の教会でした。教会堂であることに最初はびっくりしましたが、聖なる雰囲気の中、囁くような美声を聴きに来た方々は満足していたようにみえました。しかし、当たり前のことですが、これは純然たるコンサートでもありまして、礼拝との決定的な違いを、私に強く印象づけさせる機会となりました。説教はなく、讃美歌もないのです。

一方、先日、友人と話していたら、友人の母親が最近、とあるプロテスタント教会に足しげく通っていることに触れ、その原動力のひとつが、どうやら讃美歌を歌うことにあるようでありました。礼拝のときに、歌う讃美歌の数はひとつの礼拝で何曲にもわたり、毎週ごとに教会歴に沿ったものでありましょう。また、一冊の讃美歌集には、国の多様性、時代の厚みがぎゅうぎゅうに圧縮されており、讃美歌の力の大きさ、長い歴史にわたり膨大な場所で歌われた賛美の証し、源(みなもと)が詰まっていることに、今さらながら気づく次第で恥ずかしいかぎりです。

礼拝において、会衆が、神に能動的に声を出して呼びかけ祈る行為の大半が讃美歌であることは、教会に集う意味をもう一度考える上で、自分自身にとって小さくない気付きとなりました。

わたしは三十歳前後に受洗し、その直後に、ある一曲を、よく歌い、道でも歌いながら歩いていました。いまでも、いちばんに浮かんできます。それは、「讃美歌・二編・ともにうたおう」の中の、讃美歌12番・礼拝賛美です。「めぐみゆたけき主をほめたたえまつれ、そ

のみいつくしみはときわにたえせず。すくわれしみたみよ、おごそかにうたえ、あわれみとまことは、ときわにたえせず。」が1番です。この曲は、3番までありますが、それぞれが補完しあって、かつ、全体が綺麗に完結しているように思われます。

わたしは、無神論者に近い家庭に育ち、学校もキリスト教とは全く無縁でしたが、ある日、キリスト教に触れて、180度の価値観の転換に会ったようなものでした。当初はひとりて神を信じていけばいいのではと思っていましたが、柿ノ木坂教会に通い始め、ひとりではどこにも辿りつけないような気持ちが強まりつつ、通うことを続けた記憶があります。

「讃美歌・12番」は、受洗直後のわたしをゆっくり論ずるように語りかけてきました。神へのおそれも忘れてはならないというメッセージもふくまれています。何故この曲が一番に頭に浮かんできたかは明確にはわかりませんが、ゆったりとしたリズムと、静謐な厚み、親しみやすさ、など、豊富な要素を持っているからでしょうか。信者として未だ至らないところが多いわたしゆえに、さらに歌い、身に染み込ませなければなりません。いとひろきところに、いこわせたもう主よ、どうぞ見捨てないでください。

もうひとつ挙げたいのが、讃美歌21の29番「天のみ民も」です。これは、たしか礼拝の前半に歌うものであったかと思えます。短い曲ですが、世俗にとらわれがちである心身を、礼拝の空間にいることを強く認識させてもらえる曲ではないでしょうか。ややアップテンポでもあり、一度沈潜した精神を、牧師先生の解き明かしの時に向けて、神聖に精神

を高揚してくれる讃美歌だと勝手ながら解釈しています。

さて、私の聖句というと、大げさですが、よく口ずさんでいるのは、主の祈りです。「天にまします我らの父よ。願わくは御名を崇めさせたまえ」から始まる祈りです。ときどき、紙に書いたりもしています。書いてみると意外と時間がかかりますが、書いているときは、恥ずかしながら、至福の時になります。この祈りには、信徒として唱えるべきもの、ほぼ全てが網羅されているかもしれません。日曜日以外の日にも唱える場合もありますが、落ち着かない生活をしているせいか、祈らない日もあります。そのような日の終わり方はご想像がつくかと思います。しかし、いまこうして、この原稿を書いていると、この祈りの奥行きの高さに対して驚愕に近いものを覚え

ます。教会で、あるいは部屋の片隅で、この祈りを唱えるとき、気のせいかもしれませんが、静寂で、求めている領域にほんのわずかも近づけたような感覚になります。

また、使徒言行録 17 章 28 節にあります「我らは神の中に生き、動き、また存在する」という聖句は、文学調なリズムであることや、神が自分を再創造してくださるような感覚を覚えることから、好きな聖句とさせていただいています。

わたしのようないしょうがない人間でも神の中に存在できればと切に祈ります。ときに、生活などに追われたり、つまらないところにころを奪われがちな身ではございますが、今後は、讃美歌や聖書に、よりもっと近づいていけたらと思う次第です。

少しスペースが余りましたので、鈴木丈哉さんからいただいた原稿に関連した、讃美歌のことを付記しましょう。

原稿の中にある讃美歌 12 番とは、以前礼拝で使っていた 1954 年版の讃美歌に収録されている曲です。文中に「讃美歌・二編・ともにうたおう」とありますが、正確には「讃美歌・讃美歌第二編・ともにうたおう」で、3 冊が合本された歌集です。讃美歌第二編は 1967 年に教会の礼拝以外の集会にも使えるような曲を入れたもの、「ともにうたおう」は 1976 年に出版された曲集で、新しく作曲された曲で構成されています。短歌による日本の歌や交唱、カトリック教会からも編集委員を入れ、エキューメニカル（超教派）な歌もあります。

讃美歌 12 番の曲は、現在礼拝で使っている讃美歌 21 では、152 番です。曲名（正確には曲名ではなく、歌詞の初行部分を記しているのですが）の上に「詩編と頌歌 詩編 118」とあり、譜面上、左右に「ジュネーヴ詩編歌」とあります。ドイツのマルチン・ルターに続いてスイスで宗教改革を行ったフランス人ジャン・カルヴァンが、ジュネーヴのサン・ピエール教会で用いた詩編歌の一つです。カルヴァンは旧約の時代から大切に歌い交わされてきた詩編を重視し、150 曲の「ジュネーヴ詩編歌」を残しています。讃美歌の歌詞ページの一番下に記されているように、詩編の 118 編などから採られています。

日本のプロテスタント教会の日本人による讃美歌集は、プロテスタント各派が協力して 1903 年に出版されました。さらに時代の変化に伴い、1931 年に改訂された「讃美歌」が出版されました。太平洋戦争を経て、1954 年に文語体の歌詞を口語化し、当時の中学生レベルの音楽の力に合わせて、リズムを簡単にしたり、音程を少し下げたりする改訂を行いました。これが、いわゆる讃美歌一編と言われるものです。ただ文語体を無理して口語体に近く直したため、日本語としておかしい歌詞になったものも見受けられます。1997 年に出版された「讃美歌 21」では、音程やリズムを原曲に戻し、歌詞も不快語などの修正を行いました。

（教会報編集委員会・井澤 浩一）

「牧会委員会最近の動向」

平岡 昭子

牧会は牧師先生を中心とした長老会がその働きを負っているわけですが、牧会委員会はそのお手伝いとしてこまごましたお仕事を受け持っています。

どのくらいお役に立っているか心もとない限りですが、7名の決して若くない委員たちと9名の教会報発送奉仕者たちの健闘ぶりをお伝えしたいと思います。

牧会委員会の大切なお仕事の中に、教会報をお届けするという大変地味な奉仕があります。遠隔地・海外に住まわれる教会員、病床の友、色々な理由で長い間礼拝にいらっしやれない方々、そして前任の牧師先生、元伝道師、神学生だった皆さま、2017年度は全部で129名の方に隔月にお送りしてきました。教会報と共に月報も読んでいただきたい方、お当番表や各会のお知らせを待っていらっしやる方、イースター、クリスマスのご案内、各種献金袋、ご病床の方には「こころの友」も入れて・・・とできるだけ細やかに気を遣いながら、牧会委員の他に9名が奉仕しています。

年度初めには委員会のご挨拶も兼ねて送り状もお届けしています。経験豊かな原島正委員の担当で会員の消息なども織り込んで1年の報告が書かれています。それを読まれた勝田英嗣先生からメールをいただいたときは、誠にうれしいことでした。「在任中の会員の消息（特に逝去）は知らないでいたくないという気持ちなのです。」と書かれてあって、胸を打ちました。「逝去者の中にかつて主にある交わりをいただいた方のお名前を見出し、当時を思い起こし祈らされました」と書いてお葉書をくださったのは木下宜世先生です。

何人もの方から折に触れていただくお便りは本当にうれしいものです。「母の目からスーッと涙が流れました。教会にはたくさんの思

い出があるのでしょう」と洗節子姉のお嬢様からののがきです。全く音沙汰のなかった遠隔地の方から「教会報を送っていただいております。ありがとうございます」とうれしいお便りが献金と一緒に届くこともあります。お送りしてよかった！と係りの者と一緒に喜びます。

お誕生日のお祝いは家庭でもしますが、受洗記念日は教会だけが覚えている大事な記念日です。柿ノ木坂教会の全受洗者に牧師からお祝いの葉書が送られます。牧師から届けられたみ言葉を美しい葉書に制作し、年間300枚に住所を書いて、牧師にお届けするのも牧会の仕事です。それを一人の姉妹が受け持ってもう何年にもなります。80歳以上の方にはお誕生日記念葉書も、召天者ご遺族に10年間毎年お慰めの葉書もそれぞれの担当姉が工夫してお送りしています。思いがけない方からのお礼状はご遺族からのものが多いことに気が付きます。

同時に毎月お誕生日の方とご召天者を牧会ボードに掲示します。時々じ〜っと眺めていらっしやる教会員を見かけて、お役に立っていることを喜び合います。

悲しい時のお慰め、うれしい時のお喜び、感謝、お見舞い・・・その方がたにぴったりの聖句でカードを差し上げることも委員会が目指している一つです。

今年は「祈りの友」を更新する年です。教会から離れている友を教会全体で祈り続けていくことも大切な活動の一つだと思っています。

年間を通じてのこれらのお仕事の他に牧会委員会は教会行事にも関わっています。その中で昨年の「聖徒の日」についてご報告して

おきましょう。

11月最初の聖日「聖徒の日」、礼拝後に続く茶話会は、以前から牧会委員会のお仕事として引き継いで、毎年過去1年間の召天者ご遺族との親しい交わりの時として過ごしてきました。2017年から2018年にかけて6人もの方を天にお送りした昨年の「聖徒の日」は、9人のご遺族と共に礼拝をささげ、教会員もたくさん参加して茶話会が開かれました。「家族に一人信仰者がいるということ」の意味を渡邊牧師は繰り返し語ってくださっていますが、教友たちが語るなつかしい教会での思い出話と故人の思いがけないご家庭でのエピソードは、時にはみんなを笑いに巻き込みながら、お互いに心を通わせてよい交わりの場となりました。一人びとりの生涯に主がしっかり寄り添ってくださったことを感じるひと時でした。

春にはイースター、夏休みがあけるとすぐ「高齢の方などに配慮した礼拝」を捧げるた

めの準備に入ります。そして11月の聖徒の日、クリスマスと続きます。牧会委員会は夏が過ぎると息継ぐ暇もなく毎月の行事に追われます。時には体調を崩し、愚痴も出たりしますが、その都度、多くの方に助けていただきながら、委員会がまとまって仲良くなって行くのを感じます。牧会委員会が内部分裂というわけにはいきません。大事な個人情報も気を付けてお預かりしながら、高齢者の多い委員会は、体力ではなく知恵でご奉仕したいと考えています。

ご協力よろしく願いいたします。

(牧会委員)

平岡昭子(長) 熊切奈々瀬、澤村幸子、
豊田滋美、林 由紀、原島 正、横井真紀
(發送奉仕)

安宅修代、飯島久美、今井燿子、岩田良子、
小椿尚子、三東敏子、野辺田頌子、
日向真理子、三好道子

☆☆☆ 2019年の教会歴 ☆☆☆

灰の水曜日 3月6日(水)
受難節(レント) 3月6日(水) ~ 4月20日(土)
受難週 4月14日(日) ~ 4月20日(土)
洗足木曜日 4月18日(木)
受難日 4月19日(金)
復活日(イースター) 4月21日(日)
昇天日 5月30日(木)
聖霊降臨節(ペンテコステ) . 6月9日(日)
待降節(アドヴェント) . . . 12月1日(日) ~ 12月24日(火)
降誕日(クリスマス) 12月25日(水)

今月のメッセージ

——ホームページページ巻頭言——

ホームページには多くの情報が掲載されています。

ぜひご覧ください

<http://kakinokizaka-church.com>

ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」(新共同訳聖書・使徒言行録第3章6節)

クリスマスイブの聖夜礼拝には、教会の近隣の方々が多く出席くださり、おそらく出席の半分以上の方たちが、この日の礼拝だけはどの思いで出席くださった方たちではないかと思えます。心から歓迎するものです。

聖夜礼拝は夜の礼拝ですので、子供たち、教会学校、幼稚園の生徒や園児たちの出席が難しいのが残念ですが、それでも子供たちの手を引いて出席くださった家族もあります。子供たちの中にはもう眠い時間だったのでしょうか。説教の途中で寝てしまう子も見受けられましたが、でも暖かい礼拝を眠りながらも経験したことはきっと大切なものとなるでしょう。かつて同じように眠ってしまっていた子も、今は小学生になってしっかりと礼拝に参加していました。

クリスマスイブの礼拝では、以前にはキリスト教学校のハンドベルのチームに奉仕をしてもらって楽しいコンサートをしたりもしました。教会よっては、プロの演奏家を、その晩、招いて主の降誕の祝いをという教会もあったことでしょう。しかし、この一晩にすべての教会が重なっての、一年の中でも大きな礼拝の日なので、こういった演奏家やチームは引く手あまたです。ずいぶん前から予約しても奉仕してもらうのがなかなか難しいこともあります。

そこで、ここ数年、わたしたちの教会では、教会のハンドベルチームと聖歌隊、そして教会

員有志に奉仕をしてもらってのミニコンサートとしています。日々学校で訓練を受けてきたような中学生、高校生のハンドベルの演奏には到底及びません。歌や楽器によってプロとして歌い、演奏してこられた方たちとはとても比べることはできません。けれども、同じ礼拝の中で、同じ御言葉に養われた者たちの何らかの安心感がこのコンサートにあるように思います。難しい曲を演奏するわけではありません。鍛え上げたようなテクニックを披露するのでもありません。素朴な賛美、演奏です。きっと、今の時代、お金を積みばいくらでも素晴らしい演奏も、歌も、合唱もはるかに高い音響効果を備えたホールで聞くことができるでしょう。

弾き間違ってしまうこともあります。声が出なくなってしまうこともあります。わたしたちのできることはそうなのです。これが言い訳や強がりのように聞こえてしまうと残念ですが、しかし、教会の歌や演奏には何かがあるのです。そして、それは、きっと同じ御言葉に養われてきた者たちに共通する何かなのです。わたしたちの拙い言葉も、貧しい思いも、歌も、演奏も、キリストの誕生を祝うためのささげものです。キリストを指し示したい、という思いからの演奏です。ここには信仰によってこそ示すことのできる言葉があるのだ、と信じるのです。

礼拝へと足を運ばれ、キリストの御降誕をわたしたちと共に喜んでくださった方々が多くありました。感謝なことです。また、この年の終わりにも予定くださり礼拝へとお出でください。お待ちしております。

(牧師 渡邊 義彦)

編集後記

- ・教会委員会は、伝道委員会同様大切な活動です。伝道の活動が外に向かっているのに対し、牧会は教会の中に向かって、見守り、共に手をつなぎあって信仰生活を送れるよう、細やかな配慮に満ちた活動を行っていることが報告からよくわかります。
- ・主のご降誕を祝う行事も、特に聖夜は多くの方がお越しになって、滞りなく進められました。青年会の活躍は目を見張るものがあります。
- ・寒い時期と重なる受難節。そして喜びの復活日を迎える備えの時期ですね。
- ・教会報へのご意見、ご感想をお寄せください。

(編集委員長 井澤浩一)

集会案内

主日礼拝 日曜日 午前10時30分

聖餐夕礼拝 第1日曜日 午後5時

入門講座 日曜日 午前9時30分

教会学校 日曜日 午前9時

(幼稚園、小学科、ジュニアチャーチ)

*ジュニアチャーチは中学生、高校生です。

聖書と祈り会 水曜日午前10時、午後7時30分

日本基督教団 柿ノ木坂教会

〒152-0022 東京都目黒区柿ノ木坂 1-31-19

電話 03-3717-3870 (教会・牧師館)

03-3723-3870 (ベテル幼稚園)

牧師 渡邊 義彦

協力牧師 松下 恭規